出前授業再開についての所感を交えて

詩　生きる　谷川俊太郎（光村六年）　授業の構想と脚本

詩の指導について書いてみます。（教室を想定した脚本）

私は、詩指導は一時間で済ますことが多いのですが、この詩の場合には二時間扱いの学級が多かったです。一時間の場合には一、三、五連を中心に授業しました。今回は、五連とも扱うことを考えました。もちろん二時間あれば、より踏み込んだ扱いと暗唱の時間を多く取りたいと思います。以下その構想などを書きます。

ところで、みなさんは詩の授業をどのようにされて来ましたか。以前の私は、何をどうしたらよいのかよく分かりませんでしたので、読んでおしまいという感じでした。そんな私が六十五歳からの出前授業を通して学んだことは、楽しく詩を読むということの大事さです。言葉の働きはいろいろありますが、何か伝える時に使うものです。でも、その何かが、言葉では伝えられないときもあります。詩人はそんな言葉の力を感じ取っているようです。そこで生まれた詩人の工夫が、詩の中には盛り込まれています。授業でその工夫を見せてあげると、詩の面白さが味わえるようです。詩人の工夫には層があり教科書の詩の並べ方に、谷川さんは疑問をもっていると書いています。

もう一つ、小学校の教育で最も大事なことは、如何に集中力を育てるかです。あらゆる教育活動の根底には、集中することを前提にしています。別な言い方をすると、行事でも教科の授業でも主体的に活動することをねらって企画運営しています。もちろん、常時集中できるものではないので、適宜休憩も組み込まれています。今回も、集中力を育てるというつもりで授業を組み立ててみました。

最後に、学び方を実体験してもらおうと考えています。学びの多くは、文章を読むことから始まります。小学校は、文章をどのように読んでいったらよいのかを、文章を読み書きする基礎を、学ぶところです。私は、文章を読む手順を四つの段階で考えています。①先ず、一読して大意をつかむ学習。②①を受けて、詳しく読むところを絞る学習。③②を受けて、大意を具体的に明らかにし、文章の核心をつかむ学習。④文章の核心をつかんだ目で文字・語句・文法等の働きを文章に即して理解し、活用する学習です。この学習活動を通して、音読や視写、書き出した語句を手掛かりにして文章を考える方法などの成果を実感し、自学自習の参考になる案を作っています。

私の授業では視写の時間を大事にします。それで、話し合い活動が十分に取れません。話し合い活動は、社会科、理科などの具体的な事象の観察・実験などをもとにして分析・整理する活動と一体となる授業で行うのがより効果的だと思っています。また、算数などでも、いろいろな考え方を比較検討することでその教材の本質を明らか

にできます。ですから、話し合うことが必然となると考えています。

さて、教室に入ります。ここで大事にしていることは、笑顔です。笑顔は世界共通語です。友好の気持ちを伝える力があるからです。三百回超える出前授業で確信を得たことです。担任時代にはそのことを強く意識していなかったことを後悔しています。家庭での問題や職員室での課題を引き摺らないということです。

笑顔で「おはようございます」と入室すると、子どもたちもそれに応えてくれます。その出会いが、この一時間の方向を決めます。それが、出前授業の魅力でもあり、怖いところでもあります。子どもたちは、不安と期待の入り混じった気持ちで授業者を見ています。学年が上がるにつれてその感情が表に出なくなりますが、第一印象は強いものです。私も、学級の雰囲気と配慮が必要な子の発見に努めます。ですから、入室から授業が始まるように進行も私に任せていただいています。その流れのなかで自己紹介も含め、子どもたちとの距離を縮める工夫をしてきました。

「突然ですが、早速テストをします」と告げます。多くの場合、子どもたちは身構えます。「では、テストをします。最後まで聞いてから始めてください。授業の準備です。鉛筆一本をノートの今日書く所に挟んで、教科書を下にして一緒に机の真中に揃えて置きます。そして、それ以外の物は机の中にしまします。さあ、始めてください」と問題を提示します。学年に応じて、節毎に分けて作業を見守りながら行いますが、六年生では一括して指示します。（学級の実態が見えてきます。先生の指示が、話が、しっかり伝わるかどうかを知ることができます。一度にいくつまでの指示が可能かを知り、授業の組み立てを修正するのです）

「先生、消しゴムはいらないのですか」と反応する子が必ずいます。そういう子は、状況を判断して不足する物に気づく力があるのでしょう。大切な力がついていますが、もう少し考えると、言わなかったのには何か訳がありそうだと考え、次の指示まで待つという見方もあります。中には、言われたことしか考えないで疑問も浮かばない子もいます。それらを含めて、現実を肯定的に捉え、育つ方向を示しながら共に歩むという姿勢が出前授業には求められます。このテストでよい緊張感が生れます。

消しゴムの問題ですが、自分のノートですから見え消しでよいことを伝え、その意義を知らせます。ノートは自分史になるということです。間違えは、その時の自分の姿を知る手掛かりになるのです。それが、自分も大きくなったなあという自己肯定観を生む大事な資料になるのです。また、間違えたらその場で直せばよいだけのことです。人は間違える動物です。その事実を肯定的に受け止めることです。消し去ってしまわなくてはならない悪ではないのです。それでも消しゴムが必要という子には認め

ます。その子の特性や発達段階があるからです。

指示を出したらその評価をします。

「テストの自己採点をしてください。問題は、教科書の上に鉛筆を挟んだノートを机の真中に揃えて置き、他の物は机の中にしまう、でした。聞いたことを正しく行う力が付いているみなさんとの授業は、楽しいものになりそうです。私もいろいろ工夫します。みなさんも発想を豊かにして詩の授業を楽しんでください。」

それでは授業を始めます。私を見てください。教室全体の様子を見て、礼をしながら「おはようございます」と改めて挨拶をします。子どもたちもそれに応えるでしょう。児童の号令で始める場合もありますが、これでスタートできるものです。

では、教科書を順に五人に読んでもらいます。読むところを分けます。ノートから鉛筆を出してください。教科書の『生きる』のところを開けてください。（教科書を見せながら）この詩は、五つに分かれているので五連の詩といいます。各連の最初の行の上に算用数字で1から5と番号を書いてください。（1・2…5と板書）

では、読んでもらいますが、今日よむ順番は決まっていますか。では、最初に読む人と板書を読む人（一よむと五よむ）の計一〇名を割り振ります。

読んでもらいますが、読む人は立って読んでください。前の人が終わりそうになったら次の人は立って待っていてください。聞く人は、両手で本を持ち腰を立てて黙って、どんなことが書いてあるか考えながら聞いてください。1番の人は立って、大きな声でゆっくり読んでください。題と作者名も読んでください。では、お願いします。

詩は、第一次（概観）と第二次（詳しく読む）を組み合わせ、一時間で指導します。

〈一よむ〉 順繰り読み（読めない子への助け船は教師が。子どもに口出しさせない）

・読後評価 読み手には、指示を評価規準に労をねぎらい、聞き手には、指示を元に前向きな評価（育てたい児童観に沿う）を一言添える。（温かな学級作りの視点）

〈二とく〉 ○題目　◎ひびき　○手引き　と三つあるが境界は明確でない。

○題目　「さあ、これから先生が書くので静かに見ていてください、と意識の方向（教師の背中に集中）を示します。「生きる　谷川俊太郎」を板書。チョークの白さを出すこと、正しくきれいな字を書くことは、小学校教師の大事な心構えです。

①　谷川俊太郎さんを知っていますか。今でも活躍しています。皆さんが使った教科書にも載っています。探してみてください。その谷川さんが詩集**「うつむく青春」**に載せた「生きる」という詩です。この詩の特徴を調べます。各連に共通すること

を三つ以上探して呟いてください。（つぶやきで連想を楽しもうと知らせる）

② つぶやきを聞きながら「生きているということ、いま生きているということ」を板書します。「ということ」「こと」で終わっているとか、繰り返しの言葉（それは、いまなど）があるとか、七五調、五七調が使われているとかが呟かれるのを受けて応じていきます。

③ ところで、題は「生きる」ですが、詩の中では何と出ていましたか。「生きている」を受けて、言い方の違いを考えると詩が楽しめることを知らせ、検討を始めます。

◎ひびき　（詩の種＝気付き・発見の予想）

④ 「生きている」は、今現在のことを指し、「生きる」には、これから先どう生きていくかという決意が感じられることを確認します。今見たり聞いたり感じたりしたことを書き出して考えているうちに、自分はどう生きていきたいかが見えてきたという詩ではないかと予想を立てます。

⑤ 連毎にどんなまとまりがあるかを考えます。三行目から三行ほど各行の中からこれはと思う言葉をつぶやきながら用紙にメモしてください。（用紙を五枚配布し、1から5と番号を書かせ、一連目の用紙を使ってメモの仕方を全員で練習）一連の三行目の「それはのどがかわくということ」から一言メモするとしたらどの言葉を選びますか。そこに個性が出ます。私は「かわく」としました。（1の下にかわくと板書）四行目は「まぶしい」にしました。五行目は「思い出す」にします。（板書）ここまででどんなまとまりになるか連想できますか。残りも考えると体で感じたことでしょう。五感という言葉があるでしょう。そこで、漢字二字の言葉「感覚」ついての連としました。以下同様に五連まで行います。（文明・感情・時間・自然）

⑥ 二時間扱いならこの言葉から各連の連想や想像を膨らませます。

○手引き　（〈六とく〉でこの詩を味わうために必要な個所の視写を指示）

⑦ 指示…この詩を楽しむために各連の最後の二行を用紙の続きに書き出します。

〈三よむ〉　○手引きに沿い連想を膨らませながら黙読する。（第二次指導に移る）

〈四かく〉　「三よむ」と同時進行で二行を書き出す。（教師は工夫して板書）

〈五よむ〉　（机上整理後）板書を手掛かりに各連を続きの五名が音読する。

（事前に読み手に予告しておくと共に、読めない所は支援する）

〈六とく〉　○語義・区分　◎山　○余韻　と三つに分けて立案。

○語義　難しい言葉はないかと、自覚を促してから語句の意味・意義を問います。

① 一連（木もれ陽　ふっと）二連〈それは　カタカナ語　かくされた　注意深くこばむ〉三連（ける・える・れる）四連〈どこかで　産声　傷つく　過ぎてゆく〉

・区分　文章は分けると考え易くなることを学ばせます。

② 「それは」の意味を考えながら区分を行います。（各連は問いと答えで構成されていて、答えの方は、更に二区分できることを考え、各連を確認）

◎山　詩を味わう。

③　〈三連〉から考えます。皆さんなら三連のどこに共感しますか。「自由」との反応に、この自由とは、具体的には何ができるということでしょうか。いつでもどこでも「泣・笑・怒」ができることの大切さに気付いたということでしょう。それを簡単な日本語でいうと何の自由でしょうかね。（心の自由）

④　では、各連の中の自由について考えてみましょう。（一連…手をつなぐ、二連…こばむ・出会う、四連…時の流れという選択の余地がない世界＝運命、五連…愛する）（自由を○で囲み、そこから各連の言葉に向けて→を引き、その言葉を○で囲む）

⑤　今日は五連をみんなで味わってみます。他は自分で楽しんでください。（ここから語義・区分に戻る）答えの部分の区分の仕方がもう一つあります。（最初の区分で出たら省略）そうすると、六行目の「人は愛するということ」が両方に入ることになります。それだけ大事な行だということを示していることを確認します。また、「鳥はとぶ」でも意味は違わないのに「はばたく」を使っている訳を「とどろく」との関係で考えます。

⑥　「海はとどろくということ」は、七五調になっています。「鳥はとぶということ」を「鳥ははばたくということ」にすると同じ七五調になること、さらに、「人は愛するということ」も七五調です。「かたつむりははう……」は、七五調を崩しています。しかも、全部仮名書きです。他の三行は、漢字を一字ずつ使っています。詩を目で読んだ時に受ける感じを考えて工夫して書いています。

⑦　更に、詩は朗読することから発展してきたことを知らせます。音の響きの効果も狙ってこの言葉を選んでいることを分析して見せます。ローマ字表記すると音の響きがよく分かります。

⑧　五連の気付きは何でしょうか。（鳥は……人は……）から考えるとよいことを知らせます。「人は愛するということ」は、特別なことではなく自然なことだと再発見したのです。その感動が全身の感覚を目覚めさせ、大きな感動へと変化していくことを味わいたいと思います。最後に、一連から五連へと想像の広がりと深まりが、ここで、最初の感覚の世界とつながっているという、この詩の構成を確認して終わります。

○余韻　この詩、面白い。覚えてみよう。

〈七よむ〉　授業を振り返りながら板書を指音読します。ここの読み声で授業の評価ができます。張りのある読み声が聞こえると指導者も安心します。残り時間で暗唱を試みたいと思います。

授業は、ここまでにします。いろいろつぶやいてくれました。さすがは六年生です。

卒業式まで残り少なくなりました。よい思い出を残してください。私もよい記念になりました。皆さんから元気を頂いたことに感謝しています。

今日書いたメモを元にして、どのくらい再現できるか試してみてください。結構できると思います。自信になると思いますので挑戦してみてください。忘れたところは、抜かして書き上げることが大事です。そうすると、自分の癖が見つかります。それは、今後の自宅学習のコツを見つけるヒントになります。書けたものを学校に持ってきて学級で交流するのもよい思い出になると思います。

「私を見てください。」と呼び掛け、呼吸を見計らって礼をしながら「ご苦労様でした。さようなら」と挨拶して終わります。

板書事項は。別紙の指導案をご覧ください。

出前授業を再開するに当たり、先の見えてきた私からの思いを書きたくなって書いたものです。何かの参考になることが一つでもあればよいと思っています。古風な指導法で今の教育界では役立つことは少ないかも知れませんが、足掛け十年になる出前授業から得られたものですので、今の教育にも生かせることがあるようにも思い、書いてみました。妻には笑われているのですが、歳とったのでしょうか頑固になっているようです。繰り言をいいました。今回の出会いをつくって頂き、気力が沸いて来たことに感謝して筆を置きます。

平成三一年二月

六年担任　各位

六年生　詩　　（教科書　光村）

生きる

谷川俊太郎

目標

・詩「生きる」の構成や連想・想像する楽しさを知り、暗唱できる。

○準備（教科書と鉛筆一本　視写用紙）

○読んでみましたか。　感想は。

〈区画〉　一連一区画で五区画

一　よむ（音読　五名　各連一名ずつ）

○席順に、大きな声でゆっくりと読む。

○聞き手は、立腰、集中して聴く。

○読後、読み手と聞き手を評価する。

二　とく（読後感の整理の話し合い）

○　題目（詩の輪郭・特徴を確認する）

・（生きる　谷川俊太郎）と板書

・各連の書き出しの工夫（繰り返し）

・頭韻と脚韻、体言止の効果

・「生きる」と「生きている」

◎　ひびき（詩の種＝気付き・発見の予想）

・生きている（今）生きる（先）決意

・各連の三行以降の各行から一言メモ

（連毎に用紙「B5を四等分」に

各自メモし、教師は板書）

（二時間扱いなら連想・想像を楽しむ）

・各連の対象を漢字二字の言葉で表現

（感覚・文明・感情・時間・自然）

○　手引き（視写の指示）

・各連最後の二行を味わいながら書き出す。

三　よむ（手引きに従い黙読）

四　かく（視写　教師も板書）

○しっかりはっきりと視写

○書きぶりの確認評価（一時間目ここまで）

五　よむ（音読　一名）

六　とく（板書をもとに話し合う）

○　語義（難しい語句の解消）**・区分**

一連（木もれ陽　ふっと）

二連（それは　カタカナ語　かくされた

注意深く　こばむ）

三連（ける・える・れる）

四連（どこかで　産声　傷つく

ぶらんこ　過ぎてゆく）

・区分（問と答、答えを二区分）

◎　心（詩の種＝どう生きたいか＝の確認）

〈三連〉の気づきから考える。

・感情の自由＝「泣・笑・怒」ができる。

・各連の自由を探す。（一連→五連）

〈五連〉より深く味わう。

・三行目～六行目までを考える。

（五行目の意義とそれ以外の共通点）

（「はばたく」と「とどろく」の役割）

・五連の気付きを考える。

人が愛することは当たり前だという気付きが、どんな連鎖反応を起こしたかを考える。谷川さんの工夫を味わう。

○余韻　この詩は面白い、覚えよう。

七　よむ（全員で黒板の詩を音読）

・指音読（鞭の指揮で音読）

・暗唱（漢字は残して）

〈板書事項〉

―ている　今

生きる　先　谷川俊太郎

―た　前

答　問

1感覚

生きているということ
いま生きているということ
かわく
まぶしい（木もれ陽）
思い出す（ふっと）
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと

2文明

それはミニ―
プラネタ―
ヨハン・―
ピカソ
アルプス
美
そして
かくされた悪を注意深くこはむこと

出会

3感情

泣ける
笑える
怒れるということ
自由ということ

4時間

いま　犬
地球
産声
兵士
いまぶらんこゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと

5自然

鳥　ははばたく
海　はとどろく
か―
人は愛する
あなたの手のぬくみ
いのちということ